中友会

［発行所］
中友会
港区西新橋1-22-13
全日本中学校長会館202号室
東京都中学校長会事務局内
TEL 03-3504-8705
FAX 03-3504-8706

もう一つの共生

中友会の重要な取り組みの一つ『財政健全化』にご協力いただきありがとうございました。

中友会副会長　河原　敏子

偶然か必然か、会報編集担当者から原稿を依頼されたのが、前回も今回も「仲秋の名月」を拝した数日後のことであった。

新聞記事を借りると前回は岩手県陸前高田市の奇跡の一本松と満月、今回は十五夜と満月が同一日であるという稀な年であった。因みに来年は、十五夜が九月八日、満月は九月九日と暦にある。五輪の東京開催が決まった後の満月であったが、改めて東日本大震災に遭われた各県市区町村の災害復興を願い、亡くなられた方々のご冥福を祈る。

さて、近年、私が歳を重ねた所為か、ご家族を亡くされた方々から「遺句集」や「思い出寄稿集」「遺歌集」等が何冊も送られてきた。「コスモスのいずこの花にかくれしや」と奥様に捧げられた永訣の句。また、「遺骨なき七十年の墓洗う」は、九十余歳でご逝去された母上の生涯の悲しみを感じる。

さらに遺句集の前書きに、「故人となっても、家族との気持ちのやりとりは色あせることはないでしょう。幸いなことに故人は、その手立てとなる生活の情景や、時々の彼女の感性や思いを俳句として残してくれました」と。

違った形では、故人の染色展・絵画展を催され、そのご案内をいただいた。

また、仕事の関係でのお返事に「愛深き伴侶の逝去『もういない』日々覚えしなり独り生きること」「我が先に逝きしを思えばこれでよし残りしお前が可哀想だから」と亡き人との語りが書き加えられていることもあった。

最近、ある宴席に同席した彼が歌った演歌を亡くなられた奥様の墓前で『歌唱し』、現世と来世との相思の思いに捧げると語られた。彼はまた、回忌法要の度に他の歌も歌唱されてきたとのことである。

ご夫婦の墓石には「相思」と刻まれたという。その心は「現世と来世・現世と現世・来世と来世との間で相思し合う」という意味とのこと。

いずれの方も、長年共に生活し、過去・現在・未来を語り合われた数々を色々な形で表現なさったのだろうと、生死を越えた人の絆に温もりを頂いた。

共生共存という言葉を見聞きしてから久しいが、自然に畏敬の念を抱き、自然との共生の思いを新たにしたことを思い出す。

互いの生存中の共生は勿論であるが、親しい関係の方を亡くした時の喪失感は、他人には計り知れないものであろう。私の勝手な思いであるが日本には現在、百歳を越える方が多数ご存命である。中友会にも現在、米寿以上の方が180名いらっしゃる。退職後、三十年は生存する可能性がある今の時代である。深い悲しみ・喪失感にとらわれた日々から立ち上がり、前に進んで行かねばと考えている。ご紹介した幾つかは『偲ぶ』と言うより、無意識に死者と『共生』していらっしゃるように感じた。『偲ぶ』とは、此方からの一方的な気持ちであるが、『共生』は、相手との何等かの交流が得られているような思いがする。

故人の俳句の一句一句をもとに新たな会話をする。他方、墓前での歌唱は、故人の拍手・笑顔・共に歌った声や仕草を甦えらせて、改めて共に歌う。

私は、毎年ふるさとの墓前に向かい合い、「おとうちゃん・おかあちゃん、兄ちゃん唯今戻りました」と声をかけ、子ども・孫の成長を報告することが常である。何かほっと心が安らぐ。ある『共生』の一瞬なのかもしれない。

身内・他人を問わず、温もりある思いやりを伴った思い出を重ね、心豊かな生活に努める。このことから在りのままを受け入れ、生きている限りの死者との『共生』というロマンを生み出し育むことが出来るのかもしれない。

・今年もまた盂蘭盆近づき故郷の玄関に立てば「お帰り」と義姉（あね）　河原
・後幾度この玄関に立てるかと感慨深し義姉・姪のことば　河原

中友会の大きな事業、合祀慰霊祭でも、かつて出会った・触れ合った・学ばせていただいた先人の心の声が聴こえることを祈念する。

会員ご一家がご健勝で良き『共生』の幾久しいことを祈ります。